

## 第一回「行きて帰りし物語の現実 中二の夏」

中学二年生の夏、私はアメリカにいた。小学校から所属している英語活動・国際交流団体のプログラムの一つ、「ひとりだちへの旅」と称される一か月のホームステイ交流だ。私がホームステイしたのはマサチューセッツ州の **Yearwood Family**。日本だけでなく様々な国の子のホストファミリーをするのに慣れていた家族だった。

ホームステイはすごく楽しかった。ホストファミリーは私をいろいろなところに連れて行ってくれたけれど、連れて行ってくれたから楽しかったというわけではなかった。遅くまで起きて話したり、ゲームをしたり、一緒に笑ったりと日本で遊んでいるのと何の遜色もないはずのことが、毎日とても楽しかった。

ホストファミリーが私に対してどう感じていたかはわからない。当時の私はまだ幼くて、意図的に感情表現をしようとする気は今より薄かった。(常に笑顔でいられるか、何かしてもらったらありがとうと言えるか、機嫌の悪い時にもそれを表情の上でコントロールできるかどうか、そういったことだ) 言語レベルが3歳以下にも関わらず、やること考えることはいっちょまえな中学生のホストファミリーをするということは、それなりにストレスもあったように思う。ただ、写真の私もホストファミリーも笑っている。その写真たちを信じたいと思う。

私がホームステイで最も鮮明に記憶していることがある。時がたつごとに、感情の鮮やかさが消えていくごとに、より強く、より真に迫って私の中に存在を主張する記憶だ。多分これを実感できただけで、私の夏の一か月には価値があったと言い切れると思う。

ホームステイが残り二、三日になったころのことだった。ホストファミリーとその友達で、私たちはニューハンプシャーにキャンプに行っていた。最後の思い出を彩るにふさわしい、とても楽しかったキャンプだった。暗い針葉樹の森が遠く広がっている中のドライブ。水鏡のような湖をカヌーで回って、夜中日付が変わるまでのゲームとお喋り。誰がどこで寝るか若干もめたり、みんなで試着室を占領して服を買ったり。その頃の私は「楽しい」と感じるものが国によって違うのではないという——今思えば至極あたりまえの事実だが——ことにすでもう慣れていた。

キャンプの帰り、車中のみなは思い思いアイポッドをいじったり眠ったりの時間を過ごしていた。私は何の気もなしに車窓の外を見ていた。うっそうとした針葉樹の森がどんどん濃くなっていく。日はとうに沈んで、空は赤と夕闇のグラデーションだ。私は急にこのホームステイが終わるんだなと感じた。映画でいうクライマックス。エンドロールが入る一分前。文句のつけようのない、美しいエンディングだ。楽しかったな、また来たいな、学校のプログラムとか高校生になったときとかにもう一度ホームステイしたいな。そのとき抱くであろう感想をひとつおぼろげに思い浮かべた後、私はふと——当時は明確な言葉にはならず、今言語化したらこういうことだったんだろうなと想像するのだが——思ったのだ。

「結局何も変わらないのだな」と。

当時その感情を抱いた理由は、国際交流プログラムの既参加者の感想文にあったように思う。「国際交流で人生が変わった」「この体験のおかげでこんなことに気付いて、それをきっかけに自分が大きく変わった」「成長した」……。こういったある種のビフォーアフターのような感想文はやはり目をひくし、「ひとりだちへの旅」というコンセプトにこれ以上なく即している。生きて帰りし物語というものがあるように、ちょっとダメなところがある主人公が旅に出て、いろいろな困難を乗り越えて、成長して帰ってくる、この収まりのいいストーリーは世代を超えて人の心を打つ。

かなりの耳年増であり、本を読むことが好きだったおかげで様々な感想文を読み散らかしてきていた私は「ホームステイでは自分に何かしらの事が起こり、自分の中で何かしらのことが変わるのだろう」と思ってきていた。別に魔法の妖精がでてきてかぼちゃの馬車とドレスをプレゼントされたい、それが当たり前だと思っていたわけではない。しかし何かしらが起こるのだろうとは思っていた。「何かイベントが起こって成長する」のがホームステイの本質の一つなのだと思っていたから。

多少の気持ちの浮き沈みや悩むことはあったにしろ、絵に描いたような困難・挫折・成長の三コンボは最後になっても現れず、私は私のままでホームステイを終えた。変わらなかったという事実はその事実以上に帰国後の私にとって重かった。うまく消化できなかったのだ——具体的なエピソードではないぶん、中学生の私にとってうまくとらえることができなかった。そしてどうしてあの時あのタイミングで、「結局何も変わらない」と思ったのかも私にとって謎のままだった。

あのとき気付いたことの意味を消化するには5年かかった。つまり大学生になってからやっともう一度自分の国際交流を見なおせたのだ。ティーンの間期の5年間は数字以上に長い。その長さが私にとって必要だった。

つまり、「どこに行っても、そこに行ったことによって人が変わるわけじゃない」ということだったのだ。どこに行っても変わらないものは変わらないし、変われない。何かを変えたいと本気で思うのなら、そこに絶対に必要なのは場所じゃなくて気持ちとか目的とかの別のものだ。ただちょっと変化がほしい、経歴に箔をつけたい、ここではないどこかに環境を変えたい、そういったことで人は本当には変われないのだなと今になってしみじみと思う。

私のエッセイに書いてあることは国際交流の一例だ。私にとってこの結論はとても納得のいく結論だったが、他の人はそう思わないかもしれないということは知っている。しかし一つの体験を消化するのに5年以上かかったこと、5年後にもつ意味はまた違っていること、この二つの事実を釈然としない何かを抱える人に知ってほしいと思う。